Kobe Shoin Women's University Repository

Title	終助詞「っと」「っけ」の機能-「っと」「っけ」で表現される私的領域内情報と目に見えない聞き手- Functions of the Japanese Sentence-final Particles -tto and -kke: Personal Domain In- formation Marked by -tto -kke and the Invisible Listener
Author(s)	池谷　知子（IKEYA Tomoko）
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin , No.15：11-25
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

終助詞「っと」「っけ」の機能
—「っと」「っけ」で表現される私的領域内情報と目に見えない聞き手—

池谷 知子
神戸松蔭女子学院大学 文学部
tikeya@shoin.ac.jp

Functions of the Japanese Sentence-final Particles *-tto* and *-kke*: Personal Domain Information Marked by *-tto -kke* and the Invisible Listener

IKEYA Tomoko
Faculty of Letters, Kobe Shoin Women's University

Abstract

In this study, I discuss the meaning and functions of the postpositional words functioning as sentence-final particles in Japanese: *-tto* and *-kke*. At the same time, I discuss the properties shared by *-tto* and *-kke*. These can be used as part of the dialogue (with listener), but also can be used in the monologue (without listener). I introduce the new concept "the invisible listener" in this study to solve the related phenomena. The invisible listener is relieved of the obligation to respond to the speaker. Thus, the speaker and the listener can maintain each other's "face". This study claims that *-kke* indicates the speaker's experience and *-tto* the speaker's personal information.

本研究では、終助詞「っけ」と「っと」の意味機能を論じるのと同時に、双方の共通点を論じる。この２つは、聞き手が存在する対話として使うことも可能であるが、聞き手が存在しない独話としても使うこともできる。この現象を説明する概念として、聞き手として、invisible listener という目に見えない聞き手を想定した。聞き手を不可視化することによって、聞き手は、話者の発話に何らかのアクションを起こす義務から解放され、そのことによって、おたがいのフェイスを維持することができるのである。さらに、話者の私的

Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin, No. 15, 11–25, 2012.3.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 No. 15, 11–25, 2012.3.

領域内に属する情報の中でも「ッケ」は自己（＝話者）の体験にある情報であることを示し、「ット」は自己（＝話者）の個人的情報であることを示すことを論じた。

キーワード: 「っと」、「っけ」、独話、情報のなわ張り理論　目に見えない聞き手
Key Words: *-tto*, *-kke*, monologue, theory of the territory of information, the invisible listener

1. はじめに

「もう帰ろうっと」「誕生日何日だっけ」のように文末に付き、促音に助詞がついて終助詞的な働きをするものがいくつかある。これらの形式は主に話し言葉のみに現れ、書き言葉に現れないため、今までほとんど光が当てられることがなかった。そのため、この促音に助詞がついた「ット」や「ッケ」について、管見の限りまとまった研究がほとんどない。

本研究では、この２つの個別の意味機能を論じるのと同時に、促音でマークされる終助詞として、その共通性を明らかにすることを目的とする。

2. 「ット」と「ッケ」の文法的カテゴリー

議論を始める前に「ット」と「ッケ」がどのような文法的なカテゴリーに入るか先行研究を見ていくことにする。益岡・田窪（1992:52-53）『基礎日本語文法-改訂版-』において「ット」と「ッケ」について次のような記述が見られる。（下線は筆者）

> 終助詞には、断定を表す「さ」、疑問を表す「か、かい、かな、かしら」、確認・同意を表す「ね、な」、知らせを表す「よ、ぞ、ぜ」、感嘆を表す「なあ、わ」、記憶の確認を表す「っけ」、禁止を表す「な」、等がある。
>
> 例 (22)　僕はどうせ馬鹿な男さ。
> (23)　大きな家だなあ。
> (24)　明日の会議は何時からだっけ。
>
> 注 5 終助詞に準じるものとして、「なさい（連用形に接続する）、って、っと」がある。
> (イ) もうかえろっと。

このように、「ッケ」は記憶の確認を表す終助詞として扱われており、「ット」は終助詞に準じるものとしてあげられている。それでは、なぜ、「ッケ」がはっきりと終助詞として扱われているのに対して、「ット」は「終助詞に準じるもの」というやや曖昧な表現になっているのだろうか。益岡・田窪（1992）では、その理由について特に述べられていないが、考えられる理由として、「ット」が「と思う」という引用形式の省略として捉えられてきたという背景が考えられる。

少し古い研究になるが、国立国語研究所（1963）が独話資料を分析した「ト」の用法である。その中で「ト」の用法として、以下の３つがあるとしている。

① 引用提示句

② 引用文切れ

③ ト終止文

この中で「ット」と関係があるのは３つ目の「ト終止文」だけなので、そこの部分だけ引用すると、この「ト終止文」は「不整・誤用から出たことは明らかだが、今日すでに慣用形式と認めることが適当と思われる類」であると述べられており、引用の「ト」というよりも「終助詞」として解釈すべきものであると述べられている。

ト終止文の例として次のようなものが上げられている。(1963:27)（下線は筆者）

(1)　第一番目ニハ　コノ　オー　中南米ノ　経済構造ト　イウ　モノガ　アメリカト　クラベルト　タイヘン違イガ　アルト。

(2)　コレデヨシト

(3)　モウヤメトコウト

(2) と（3）に関しては、(1) よりも更に終助詞的性質が進んだものとして同じグループに入れられている。しかし、(1) と（2）(3) は少し性質が異なる。これらの例を「ット」で言い換えてみると次のような結果になる。(*は非文を表す)

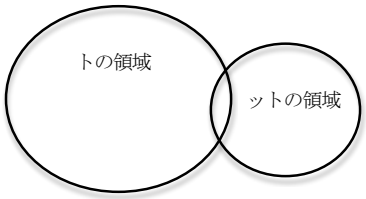
(4) *第一番目ニハ　コノ　オー　中南米ノ　経済構造ト　イウ　モノガ　アメリカト　クラベルト　タイヘン違イガ　アルット。

(5)　コレデヨシット

(6)　モウヤメトコウット

つまり、「ト」と「ット」は全くの同義でなく、「ット」は「ト」は明らかに異なった表現性を持つ。しかし、一方で「ト」と「ット」が言い換えられるものも存在している。イメージ化すると図 1 (p. 13) のようになるであろう。

図 1: 「ト」と「ット」の相関関係



本研究では「ト」と「ット」を区別し、文末の「ット」に的を絞って考察する。もちろん、これは「ト」と「ット」の関係性を否定するものではない。これまで言われているように「ット」は「ト」から派生してものである可能性が高いが、文法化が進み促音を伴う「ット」として定着した用法は、誤用ではなく、むしろ積極的に「ト」と異なる「ット」同時の意味領域を持つと考える。つまり、「ト」でも「ット」でもどちらでも構わないような、促音はオプショナルなものではなく、積極的に「ット」でなければならない領域があるとする。本稿で取り扱う「ット」は以下のようなものである。

① 「ット」という形式を持つもの。

② 「ット」で文が終わり、それ以上、どのような要素にもかかっていかないもの。

③ 「〜と思う」「〜という」などの省略と解釈できないもの。

考察の対象にする例として「コンビニに行こうっと」「もう寝ようっと」「よっこいしょっと」「あらよっと」などを想定する。本研究は、文末の「ット」「ッケ」を促音を含めた形式で終助詞としてとらえる立場を取る。

3. 先行研究における終助詞「ット」の意味—Okamoto（1995）、加藤（2010）より—

文末の「ット」を終助詞的な一種のモダリティ要素と考える方向性は別に目新しいものではない。先にあげた国立国語研究所（1963）の中でも、「ット」は「終助詞的なものである」と述べられている。また、更にはっきりと「ット」の終助詞性を打ち出したものとしては Okamoto（1995）がある。Okamoto（1995）では「ノ」「コト」「ト」「ッテ」のように、complementizer と呼ばれる補文マーカーを持つ文を一括して論じており、これらが終助詞として、話し手の内面的心情を表すモダリティとして機能していることを主張している。Okamoto （1995）は「ト」の中に「ット」もまとめて分析している。Okamoto（995:224）の主張の要点をまとめると、「ト」はインフォーマルなスピーチで使われ、話者の自己確認を表す独話（独り言）に使われるとしている。

また、加藤（2010）は「ッテ」「ト」「ット」の３つの用法の分布を論じている。ここでは、加藤（2010）での内容をまとめ、議論しやすいように「ット」のカバーしている用法を網掛けによって示す。

表 1: 「ット」の「ト」と「ッテ」の用法： 加藤 (2010) を筆者がまとめたもの

聞き手有 （発話の意識有）	ⓐ 発話の力軽減用法 はいはいっと	ⓓ 自己演出用法 ほら、バイバイって
聞き手無＝独話 （発話の意識無）	ⓑ 自己確認納得用法 これでよしと もう帰りましょうっと	ⓒ 認知境界表示用法 さてと どっこいしょっと

この加藤（2010）の研究により、「ット」には、ⓐ発話の力軽減用法、ⓑ自己確認納得用法、ⓒ認知境界表示用法という３つの用法があることがわかる。

本研究では「ト」を考察の対象外としており、「ト」と「ット」の違いについて特に触れないが、加藤 (2010) では、「ト」は自己確認を表すことができるが、話し手の直接的な感情を述べることができない。そのため、「*ああ、疲れたと」は許容できないとしている。そして、特に「どっこいしょっと」について、宣言としての話し手の考えや独話を表すとしている。そして、「ット」と「ヨ」を比較して、その違いは聞き手との話し手の関係だとしている。

(7)　ぼく、知らないっと（聞き手が何を考えているのかに無関心）

(8)　ぼく、知らないよ（聞き手が知っていると思っている）

聞き手をどのように扱うかというという問題については、後に述べることにして、ここで大切なポイントとなるのは、「ット」がインフォーマルなスピーチで使われ、話者の自己確認を表す独話（独り言）に使われるということである。この独話（独り言）とうのは「ッケ」と「ット」をつなぐ大切なキーワードになる。

4.　先行研究における終助詞「ッケ」の意味

アスク出版編集部編（2008:136）『“生きた”例文で学ぶ！日本語表現文型辞典』において、「ッケ」には次のような用法があるとされている。（原文はすべての漢字にルビがついているが省略）

① 歓迎会って、明日だったっけ？

② この映画、そんなに面白かったっけ？

③ えーっと、彼、何て言う名前だったっけ？

④ 今度の試験、範囲はどこからどこまでだったっけ？

⑤ このグラス、私のだっけ？

⑥ FAX 番号は電話と同じでしたっけ？

⑦ 昔よくここで遊んだっけ。

これらの用法の解説として、以下のような注がついている。（下線は筆者）

✧ はっきり覚えていないことにつて、相手の考えを聞いて確かめようとする表現。「それで正しかったか」を問う場合（①②⑤⑥）、「何、どんなだったかを問う場合」（③④）、さまざまな疑問を表す。誰かに答えを求めるのではなく、独り言として表現される場合もある。

✧ ⑦のように回想して言う場合もある。

✧ 話し言葉で、くだけた表現。最近は会話で、⑥のように「です・ます」に付く形もよく使わる。

このように、「ッケ」ははっきり覚えていないことに対して使い、聞き手がいる場合でも独り言でも、どちらにでも使えるとしている。

さらに、「ッケ」の意味について詳しく扱ったものとして、又平（1996）の「終助詞の研究：『っけ』の機能」がある。又平（1996：22）では「ッケ」の基本的な意味を「話し手の発話時点での記憶内情報の検索結果の提示」とし、それについて次のように述べている。

又平（1996:22）

> 終助詞「っけ」は通常話し言葉のみで用いられる。記憶内情報の検索を行う上で、検索を開始したが、その結果まだ情報が事実であると確認するに至っていないという型（A）と、検索結果、その情報が事実であると確定している型（B）とがある。

又平（1996）で述べられている「ッケ」の用法をまとめると表 2 のようになる。

表 2: 「ッケ」の用法**:** 又平（1996）を筆者がまとめた

A 未確定型	**B** 確定型
A1 疑問語疑問文 ⓐ セツコさん、私は今朝何を食べましたっけ。 ⓑ 今日、まーくんは、ママ（自称）にどこへ連れていってもらったんだっけ。	B1 納得 ⓔ そういば今年は閏年だったっけ。 ⓕ そうだ、先週のパーティーで、ワイン、全部あけちゃったんだっけ。
A2 Yes-No 型疑問文 ⓒ あなた、あの、直子さんとおっしゃいましたっけ。 ⓓ 田中さんって、東京出身だっけ。	B2 詠嘆 ⓖ その当時は僕もこんな靴、履いてたっけ。 ⓗ お母さんがセーターを編んでくれて、とってもうれしかったっけ。

「A 未確定型」と「B 確定型」の違いとして、A は情報が未確定なため、質問文として相手にその確定を要求できるのに対して、B は情報が確定しているので、質問文にならないとしている。又平（1996）では、独話という言葉は使われていないが、「B 確定型」について次のように述べている。

> B1 タイプと B2 タイプの大きな違いは、発話の動機である。B1 は発話時以前に何らかの疑わしさがあったことがきっかけとなり、記憶内情報を検索し、その結果、疑わしさがはれるような確定した情報を得る、というものである。一方、B2 タイプはそういった自問するような動機がない。(又平（1996:23）)

それでは、一体なぜ、独話として発話された時のⓖ「その当時は僕もこんな靴、履いてたっけ」に「ッケ」が必要なのだろうか。

「コンビニにいこうっと」の「ット」と「その当時は僕もこんな靴、履いてたっけ」の「ッケ」の共通点として、双方に独話としての用法があることがあげられる。これま

で見てきた先行研究から、「ット」はこれから行う自分の行動に対する宣言的な独話に用いられるのに対して、「ッケ」は自分の過去の記憶を検索して自問する確認的独話に用いられるということに、その違いを求めることができるだろう。もし、「ット」と「ッケ」を終助詞とするならば、一種のモダリティ的要素になる。しかし、独話（いわゆる独り言）にモダリティが付くというのは、やや不思議なことである。独り言というのは、聞き手もおらず、心中発話の表出である。そこに、わざわざ終助詞を付ける必要性はないからである。それにも関わらず、「ッケ」「ット」を付ける動機や機能は何だろうか。

5.　独話・回想に現れる文末形式

自然な状態で独話がどのような形式で発話されるかを知るために、上原・福島（2004）「自然談話における『裸の文末形式』の機能と用法」で示された彼らのデータで示された典型的独話の例をみてみる。上原・福島（2004）は、裸の文末形式の談話上の機能を分析しているが、「相手（聞き手）への意識・態度」が重要な指標になるとしている。

上原・福島 (2004:112)

(9)　独話の例１ →A と C が会話しているところに、B が自分の席を探している
A:そこでうかがったら、あの、むこー//うに自動販売機があるからって。
B:　　あ、→ あれ、↑わたしこっちだ { 笑い }
A:言って、//そこまで歩いて帰って来たら、
C:　　あらあら →
A:階段の下に、こういう//なったところにひとつあるんですね。→
C:　　まあー.→

(9) の独話の例では、A と C が話している時に、B が入っていて自分の席を探しているときの会話で、B の発話は A と C の会話から完全に独立している。その時に裸の文末形式が使われている。

(10)　独話の例２ → 冷房が効きすぎた部屋に A と B が入ってきて瞬時に発話
A:あー、//寒い.
B:　　あー、//寒い.
A:　　ほんとにさ//むいですよねー.
B:　　ジャケット、持ってくればよかったー.

例（9）（10）の２つの独話の例にたいして、上原・福島（2004:112）は「聞き手に伝えることを意図したものではなく、普通体の裸の文末形式が用いられている」とのべ、次のようにまとめている。（下線は筆者）

上原・福島 (2004:113)

例（1）(2)（=本論文では（9）(10)）の独話は聞き手を意識せず、あるいは意

> 識しないかのように述べられた発話である。聞き手を意識しないで述べられた発話は聞き手に向けて発せられたものではない。その点で独話と回想は共通する。この聞き手に向けない発話のグループの用例は 25 例で、全て普通体の裸の文末形式が用いられている。聞き手を意識しての発話ではないため、丁寧体を使って聞き手への待遇的配慮を表すことはないのである。

このように、真に聞き手を意識していない独話ならば、「あれー、わたしこっちだ」「寒い」のように、文は普通体の裸の文末形式が用いられることが最も自然なことなのである。そこで問題になるのは、「コンビニにいこうっと」にみられるような「ット」と、「その当時は僕もこんな靴、履いてたっけ」にみられるような「ッケ」のように、独話的なものに付く終助詞である。なぜ、独話にわざわざ終助詞を付けるのだろうか。

独話に終助詞が付くという矛盾を解決するために、池谷（2011）「引用形式をとった話し言葉のモダリティ コンビニに行こうっとの「ット」は何を表すのか〜」において、invisible listener（目に見えない聞き手）というのを設定した。

6. invisible listener（目に見えない聞き手）の存在

本研究では、聞き手がいるのかいないのか、はっきりしない「コンビニに行こうっと」「その当時は僕もこんな靴、履いてたっけ」型の表現性を説明するために invisible listener（目に見えない聞き手）を設定する。invisible listener は目に見えないので、その場に存在してもしなくても構わない。また、話し手から聞き手への働きかけがあるわけでもなく、透明人間のような聞き手である。上原・福島（2004:113）では「独話は聞き手を意識せず、あるいは意識しないかのように述べられた発話である。聞き手を意識しないで述べられた発話は聞き手に向けて発せられたものではない。その点で独話と回想は共通する」と述べているが、宣言的独話に使われる「ット」と記憶を探って回想を表す「ッケ」はその点でも近い所にある。

それでは、何故、このような、いてもいなくてもいいような invisible listener という概念を設定するのかという理由を述べる。「ット」も「ッケ」も、先行研究から、どちらも聞き手が存在する場合でも使えるし、存在しない場合でも使うことが知られている。その例を見てみる。

「ット」

聞き手有

(11) 友達のクラリネットを勝手に触っていたら、部品が取れてしまった。

A. わあ。壊れちゃったよ。どうしよう？

B. 知らないっと。

聞き手無

(12) コンビニに行こうっと。

「ッケ」

聞き手有

(13)　同僚に芸能人について尋ねる

A.　大島優子って、東京出身だっけ。

B.　横浜じゃなかった？

聞き手無

(14)　その当時は僕もこんな靴、履いてたっけ。

(11) (14) の例は聞き手の有無によって、２つの分類されているように見えるが、聞き手がいるかどうかは本質的な問題ではない。なぜなら、(11) の「知らないっと」は聞き手がいる場合にも使えるが、逆に聞き手のいない独話としても使うことができるからだ。例えば、学校から帰ってきたら、飼い犬が母親のお気に入り革靴を噛んでぼろぼろにしているのを発見したという状況を想定してみよう。その時に話者は誰もいないのにも関わらず「知らないっと」とつぶやくこともできる。この時、話者は犬に向かって話しかけているわけではない。犬に直接話しかけるなら、「知らないよ。おまえ」のように働きかけのある終助詞を使うだろう。

また、(13) においても、「大島優子って、東京出身だっけ。」と、夜、１人でテレビを見ながらつぶやくこともできる。このように、「ット」や「ッケ」は聞き手が存在しても構わないが、しない場合も同じように使うことができる。むしろ、聞き手がいても構わないが、聞き手の存在を気にしていないというところに、これらの表現の本質があるとする。

つまり、「ット」「ッケ」などの表現は、実際の聞き手がいるかどうかは関係なく、聞き手を invisible listener として不可視化すると考えるのである。聞き手を invisible listener にするとうことは、文法な問題ではなく、ポライトネスの問題だと考える。invisible listener として聞き手を扱うことのメリットとして、聞き手はその発話を聞いたとしても、返答するといった何らかのアクションを起こす義務から逃れることができることがあげられる。

つまり、話者が積極的に「これは大きな独り言だから気にしないでね」という形で発話しているのである。その時に、たまたま、聞き手が協力的であれば、話者と聞き手のインターラクションが生まれ、協調的な会話が生まれる。しかし、非協力的な聞き手として、無視していても人間関係が壊れることがない。

7.　invisible listener の語用論的効果

本論では、聞き手を invisible listener として不可視化するのは、基本的に相手への配慮によって発話されると考える。

まず、議論の足がかりとして「コンビニに行こうっと」が発話される状況を想定してみよう。本当に家に１人でいるときに、コンビニに行きたいと思ったら、黙って財布を

にぎって靴をはけばよい。このような発話がされる時は、友達と一緒にいる時に、ちょっとコンビニに行くためにその場を抜けるときだろう。そのため、自分の所在を知らせるために述べるのだが、Okamoto（1995）が「くだけた宣言」と述べているように、別に誰の許可を要求しているわけでもない。

リーチ（1987:153）は、ポライトネス理論の観点から「一般的に話し手の聞き手に対する働きかけが強く、その結果聞き手の負担が多ければポライトネスは少ない」と述べられている。つまり、「コンビニに行ってもいいですか」と聞き手から許可を取る方が、ポライトネスの観点から見ると、聞き手の負担が大きくなり、ポライトネスが少なくなる。反対に、一見、相手を無視しているような独話的な発話である「コンビニニ行こうっと」の方が、聞き手の負担が少なくなり、ポライトネスが大きいことになる。話者は対人コミュニケーション上、相手にできるだけ負担を与えないために、相手を不可視化して述べているのである。特に、友達同士でどちらかが許可を与える関係でない時に、「コンビニに行ってもいい？」「トイレに行ってもいい？」と許可を要求するのは逆に相手にとって負担だと考えるのだ。とはいえ、黙っていなくなるのもよくない。自分のことは気にしないでほしいが、何をするのか相手に知っておいてもらった方が双方にとって都合がいいという場合、あえて、「ット」で相手を invisible listener として不可視化するのである。

「っけ」においても同じことが言える。「大島優子って、東京出身だっけ。」と発話されたとき、聞き手はそれに答える義務を負わない。協力的な話者として、相手の疑問に「横浜じゃなかった？」「茨城だよ」と答えて疑問に応えることもできるし、「さあ？」「うーん」と流しても構わない。最も非協力的な話者として、無視しても構わないのである。話者は「これは大きな独り言だから、気にしないでね。でも何だったかなあ。わかったらすっきりするのになあ」という「ほのめかし」のメッセージ性をもって発話しているからである。このような語用論的効果は「大島裕子は東京出身ですか？」のような Yes-No 質問文にはできないことである。

ここからわかるように、あえて相手を invisible listener として不可視化することで、逆に相手の負担を減らす配慮を表しているのである。

一方で、実際に聞き手が存在しているのに、相手を不可視化することで、聞き手を無視するような表現効果を出すこともできる。

(15) A: 私、太郎と結婚しようと思うんです。
B1: そりゃ、よかったね！
B2: そりゃ、よかったねっと。

A「私、太郎と結婚しようと思うんです。」という発話に対して、B1 と B2 は共に「よかった」という肯定的な内容にも関わらず、「ット」が付いた途端にアイロニー的になる。なぜなら、ストレートに相手に働きかけのある B1「よかったね」をわざと選択せずに、目の前に存在している聞き手を invisible listener として扱う B2「よかったねっと」と発話することによって、相手を軽んじたり、茶化したり、「本当のことを言うと」といったよ

うな、文脈に依存した様々な語用論的効果が生まれるからである。

8. 情報のなわ張り理論から見た「ット」と「ッケ」

(16)　うっ、寒い！

(17)　あっ、落ちる。

(18)　あ、ここだ。

(16)〜(18) のように、何の意識的フィルターも通さず思わず口から出てしまった独話は、裸の文末形式で現れる。聞き手を意識していないこれらの形式は、終助詞が何も付かないのが基本である。もちろん、独話に終助詞が決してつかないというわけではない。感嘆の「寒いなあ。」のように、終助詞によっては、独話に付くこともあるが、それは聞き手を全く意識していない。

それに対して、「ット」や「ッケ」ついて発話される文は、「大きな独り言」のような文である。invisible listener として不可視化した聞き手をもつこれらの文は、聞き手から何らかのリアクションを期待しているわけではないので、非対話的であるが、（16）〜（18）のような裸の文末形式で表される独話とは少し性格が異なっている。

invisible listener として想定される聞き手は、今の自分を客観的に見ているもう 1 人の自分でも良いし、そばにいる他人でも構わない。つまり invisible listener の存在は、コンテクストに依存（高コンテクスト依存）であるため、明確に決まっているわけではない。

もし、「ッケ」や「ット」が本当に独話専用の形式ならば、聞き手に対する制限はないはずであるが、「ッケ」や「ット」は従来の研究でも、くだけた話ことばであり、親しい間柄しか使われないことが指摘されている。つまり、聞き手に対する制限があるのである。

(19)　パーティーで知った顔をみつけたが名前が思い出せない。
　　あの人の名前、なんだっけ？

(19) のように発話した場合、それが独話の場合は自問自答になるし、親切な聞き手がいて情報が得られれば疑問文として機能する。同時に（20）のように、明らかに聞き手目当てに使用することもできる。しかし、親しい間柄であるくだけた表現であるため（21）のように取引先の社長に使うことは、敬語を使ったとしてもかなり失礼であるが、同じ社長同士で知り合いなら許容されるだろう。

(20)　(20 年後の同窓会で会った同級生に)
　　お名前、何でしたっけ？

(21)　(取引先の社長に対して)
　　??御社が上場なさったのは何年でしたっけ？

このように、発話状況に使用制限があること自体、純粋な独話とは異なった、何らかの聞き手の存在が見え隠れするのである。

それでは、「ット」「ッケ」で発話される情報はどのようなものなのだろうか。終助詞のヨ、ネの研究において、「情報のなわ張り理論」というモデルを使って説明されることが多い。簡単にまとめると、情報には聞き手に属するものと話し手に属するものがあるということである。聞き手のなわ張りに属する情報には「ね」がつき、話し手のなわ張りに属する情報には「よ」がつくことが知られている。

どのような情報が話者に関わりが深く、近いということを示すかについて、神尾(2002:32)は次のようなものをあげている。

a. 内的直接体験を表す情報

b. 外的直接体験を表す情報

c. 自己の専門または熟達領域に関する情報

d. 自己の個人的情報

神尾（2002）では、これらの情報はなわ張りの内にある情報だとしている。本研究は神尾（2002）「情報のなわ張り理論」を援用し、「ット」や「ッケ」を表す情報を以下のように定義する。

(22) 促音を伴った「ッケ」「ット」
「ッケ」や「ット」で表される情報は、話者の私的領域内に属する情報である。
その中でも「ッケ」は自己（＝話者）の体験にある情報であることを示し、「ット」は自己（＝話者）の個人的情報であることを示す。

つまり、「ット」や「ッケ」は話者の私的領域内にある情報を、invisible listener として不可視化した聞き手に、一方的に発信しているということになる。そして、それは「大きな独り言」であるから、聞き手は何らかのリアクションを起こす必要がない。もちろん、相互作用的に会話を構成することも可能であるが、それは義務ではないのである。例えて言うならば、話者は「ット」や「ッケ」を使って、Twitter（ツイッター）のように自分の情報をライブ放送しているのである。

そして、その私的領域内にある情報を受け取ることができる、つまり、勝手に情報を送りつけても問題がない対人関係は、必然的に「親しい間柄」ということになる。その「親しい間柄」には自分自身も含まれる。

9. 「ット」と「ッケ」で表される私的領域内の情報とは何か

前節で「ッケ」や「ット」で表される情報は、話者の私的領域内に属する情報であると定義した。その中でも「ッケ」は自己（＝話者）の体験にある情報であることを示し、「ット」は自己（＝話者）の個人的情報であることを示すとした。

それでは、「ッケ」で語られる自己（＝話者）の体験にある情報とはどういうことをさすのか具体的に見ていく。「ッケ」には又平（1996）で述べられている記憶内検索といった働きがある。表 2 (p. 16) をもう一度あげてみる。

表 2: 「ッケ」の用法

A 未確定型	**B** 確定型
A1 疑問語疑問文 ⓐ セツコさん、私は今朝何を食べましたっけ。 ⓑ 今日、まーくんは、ママ（自称）にどこへ連れていってもらったんだっけ。	B1 納得 ⓔ そういば今年は閏年だったっけ。 ⓕ そうだ、先週のパーティーで、ワイン、全部あけちゃったんだっけ。
A2 Yes-No 型疑問文 ⓒ あなた、あの、直子さんとおっしゃいましたっけ。 ⓓ 田中さんって、東京出身だっけ。	B2 詠嘆 ⓖ その当時は僕もこんな靴、履いてたっけ。 ⓗ お母さんがセーターを編んでくれて、とってもうれしかったっけ。

自己の体験による情報には、直接経験と間接経験がある。直接経験は「ⓐセツコさん、私は今朝何を食べましたっけ」「ⓖその当時は僕もこんな靴、履いてたっけ」のように、自ら経験したことを指す。間接経験は「ⓔそういば今年は閏年だったっけ」「ⓓ田中さんって、東京出身だっけ」のように知識として知っていることを指す。

それでは、普通の疑問文と「ッケ」のもつ効果を比較するために、普通の WH 疑問文と比較してみる。

ⓐ セツコさん、私は今朝何を食べましたっけ。（ッケ発話）

ⓐ′ セツコさん、私は今朝何を食べましたか？（WH 疑問文）

自分が何を食べたかというのは、話者の直接経験であり、話者が一番よく知っていると考えられる情報である。それを WH 疑問文で、聞き手に情報の空欄を埋めさせるというのは、情報の流れとしては異常な状況である。とはいえ、日常生活において、人間は自分のしたことをすべて覚えているわけではなく、他人に確認を求めたくなる状況は多々ある。そのような状況は、まさに「ッケ」が生きてくる状況である。

「自己（＝話者）の体験にある情報」であることを表明しながら、その情報がはっきりしないことを invisible listener に対して述べることによって、上手く行けば、「お義母さん、トーストですよ」と返事がもらえるかも知れないが、聞き手に返事を強制しているわけではない。

次に「ット」で示される「自己（＝話者）の個人的情報」について考えてみる。この個人的な情報には様々なものが入る。例えば、感情、意志、個人的判断など、他者が知ることができないが、話者はそれを invisible listener に知らせたいと思う情報である。「ット」自体がコンテクストへの依存度が高い形式なので、さまざまな情報に付くことができる。例えば、「コンビニに行こうっと」と発話した話者は、その場にいる誰かに自分がコンビニ行くことを知っておいて欲しいと考えている。しかし、それに対して、聞き手

に何らかにリアクションを要求しているわけではない。ただ、「知っておいて欲しい」のである。

仕事が終わった時、「もう帰ろうっと」と言うのも、まだ働いている同僚を invisible listener として発話しているのである。言語行為には、それを発話することによって、不可避的に相手や自分のフェイスを犯してしまうことがある。滝浦（2008:29）では、「《依頼》の行為は将来における相手の行動の自由を一部制限するので、相手のネガティブ・フェイスを侵害する。」と述べている。許可を求める行動は、相手に許可を与えるという責任を負わせることになる。それを避けるために、「ット」は、あえて相手を不可視化することによって、相手の負担を減らそうとする対人的配慮から使われるのである。

10. 終わりに

「ット」や「ッケ」というのは今まで終助詞の中でも周辺的なものとして、取り扱われてきており、その意味や機能が議論されることがなかった。ましてや、この２つの共通性を問われることは無かった。本研究では、この２つの個別の意味機能を論じるのと同時に、双方とも促音でマークされる終助詞として、話者の私的領域内に属する情報であると定義した。そして、聞き手として、invisible listener という目に見えない聞き手を想定した。聞き手を不可視化することによって、聞き手は、話者の発話に何らかのアクションを起こす義務から解放され、そのことによって、お互いのフェイスを維持することができるのである。さらに、話者の私的領域内に属する情報の中でも「ッケ」は自己（＝話者）の体験にある情報であることを示し、「ット」は自己（＝話者）の個人的情報であることを示すと考える。

文献

浅野裕子（1996）「『情報なわ張り』と日英の文型選択基準—『と思う』を中心に—」『世界の日本語教育』6 号 pp.169-184

アスク出版編集部編（2008）『“生きた”例文で学ぶ！日本語表現文型辞典』アスク出版

池谷知子 (2011)「引用形式をとった話し言葉のモダリティ〜コンビニに行こうっとの「ット」は何を表すのか〜」『文林』45 号 pp.1-28

岩畑貴弘（2005）「情報なわ張り理論から見た『おめでとう』」神奈川大学人文研究 156 号 pp.106-125　野繁雄教授退職記念号

上原聡・福島悦子（2004）「自然談話における『裸の文末形式』の機能と用法」『世界の日本語教育』14 号 pp.109-123

小野正樹（2001）「『ト思う』述語文のコミュニケーション機能について」『日本語教育』110 号

大島良和（2010）「日本語引用構文における引用述語の省略現象」『茨城大学留学生センター紀要』vol.8 pp.85-99

加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現　引用標識に注目して』くろしお出版

神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館書店

神尾昭雄（2002）『続・情報のなわ張り理論』大修館書店

国立国語研究所（1963）『話し言葉の文型 (2)———-独話資料による研究』秀英出版

砂川有里子（1988）「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9 明治書院 pp.14-29

砂川有里子（1989）「引用と話法」北原保雄（編）『講座　日本語と日本語教育』４明治書院　pp.355-387

高橋陽子（2010）『日本人で知らない外国人の大疑問』アルク

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法-改訂版-』くろしお出版

又平恵美子（1996）「終助詞の研究：『っけ』の機能」『筑波日本語研究』１号 pp.21-33

メイナード K. 泉子（1997）『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版

メイナード K. 泉子（2005）『談話表現ハンドブック』くろしお出版

リーチ, J. N. [池上嘉彦・河上誓作 訳] (1987)『語用論』紀伊國屋書店 [Leech, G.N. (1983) *Principles of Pragmatics. Longman*.]

Okamoto, Shigeko. (1995). Pragmaticization of Meaning in Some Sentence-Final Particles in Japanese. Essays in Semantics and Pragmatics. *Festschrift for Charles Fillmore*, ed. by M. Shibatani and S. A. Thompson. Amsterdam: John Benjamins, pp. 219-246.

Author's web site:　`http://www.shoin.ac.jp/`

（受付日: 2012.1.10）